
吟遊詩人形

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吟遊詩人形

【Nコード】

N9995G

【作者名】

佳生

【あらすじ】

誰もが忘れた、楽園と化した大陸での物語。詩を語り継ぐ、一つの詩人の物語。

第一章 流れ星の騎士

さあ、さあ、詩を歌おう。^{うた}

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！^{うた}

誰もが忘れた楽園の詩。

「そのお歌はどんなお歌？」

『たぶん、皆が知っているお歌だよ』

「お父さんもお母さんも知ってるの？」

『たぶん皆知ってるよ。きっとすぐに分かるよ』

「なんてお名前の歌なの？」

『そうだなあ、君たち風に言うなら…“流れ星の”』

「“騎士”！」

『正解だ。じゃあ、いくよ』

世界に一つの絵本を片手に　かの騎士は星を見上げる

英雄の息子　そう言われるけど　僕にはそんな関係ない！

母の面影を残して　父と同じ姿をして

思い馳せるは　父の国での奴隷の日々

逃れ走りたどり着いた　隣国　今は魔王の国　睨めて

心に残るは　魔王の国で　出会った一人の少女

奴隷でも構わないのよ　だって貴方　兄に似てるの

そう言って笑った　黒い髪の少女

あの子はまだ　魔王の国で……

父の残した国　魔王に奪われて　可哀想だと人は言うが

僕は考えもしなかった　だって皇子だったことがない

生まれた時はまだ王国ではなかった

父が王になる前に 谷から落とされ 父と堕ちて

名だけを王国に連ねた

母は王国にいるらしいけど 母のことは覚えていない

星空の向こう側に 母はいるか 彼女はいるか？

夜が明ければ王国へ 攻め込むと帝王は言う

魔王を打ち破れ 騎士よ 聖騎士の血を継し子よ

初めの魔王を 倒した英雄 それが父の功績

けれど それは 人を 殺した

たったそれだけのことだと 知らなかった

夜が明けて 馬で駆けた野は 美しく静かで

太陽が昇るのを待たずに 轟いていたのは

魔王の叫び声

黒雲と太陽がせめぎ合う おかしな空の下で

騎士はたった一人の 魔王と出会った

真っ黒い髪 真っ黒いマント 真っ黒い衣装 真白な剣

真白な肌の 黒い闇の瞳 睨めつけるは

隣国の兵《兄の敵達》

魔王が剣を振るえば 雷鳴が轟き 雷落つる

響くのは兵たちの悲鳴だけ

魔王はたった一人で 剣を振るう

どうしてお前は 一人なのだ

騎士が尋ねたなら

お前は人が消える 痛みが 分からぬのかと

かの魔王は 嗤った

私の兄は 一人で 犠牲を恐れ戦った

国へは 一步も 入れない！ 愛すべき者たちの為に

たった一人で戦う魔王

大勢で押し寄せた騎士たち

私はその背を見ていた 兄は負けぬと 願いながら

愛する者を守るために 戦う一人の魔王に 誰もが恐れ戦いた

だが 守られていたはずの 彼が愛したはずの

その人間達に 私の兄は 魔王は 討たれて逝った！

空はやがて太陽が沈み 黒雲を助くような闇夜になる

そして荒野に佇むのは 騎士と 魔王の 二人のみ

剣を構えた騎士と 刃を向ける魔王

交える刃 きらめく星と 闇に落ちる 二人の影

騎士 と 魔王

踊り明かす 太陽は未だに 昇らない

流れる星々の下 剣だけが 音楽を奏でる

黒髪の 黒い眼の 少女の ことを

なぜ今 思い出すのか 騎士は剣を振り上げた

倒れ行く 魔王を支え 地に両膝をついた 騎士は

流れゆく星を見上げずに 黒に沈む 魔王を見やる

沸き立つ 騎士たち 喜ぶ民よ

僕はそれに笑って答えよう

偽りの笑み 偽りの喜び 偽りの 偽りの平和

流れ星の騎士の名を 僕は貰えたとしても

誰かを殺した それだけが この手にのしかかってくるよ

喜ぶ人には 喜びを 讃える人には 笑みを

魔王を倒した英雄と 父と並び 称される日々

この世の平和を願うから この笑みを絶やさずいよう

世界の安らぎの為に 僕はこの手を汚そう

全てが美しい楽園のために

死に落ちた者達のために

僕は偽りを真実にしよう

「わあ、お兄さん、お歌上手いね!」

『ずっと歌っているからね』

「お兄さん！ お兄さんはどこからきたの？」

『そんなことを聞いてどうするんだい？』

「ううん、聞きたかっただけ」

『そうか、なら、聞かなかったことにしなさい』

「どうして？」

『魔王に連れていかれちゃうからさ』

「騎士様が倒したんだよ。魔王はいないよ！」

『ふふふ、どうかなあ。魔王って、倒されても甦るものだよ？』

「えー」

『あはは！ 冗談だよ、冗談。僕は海の方こうからやって来たんだ』

「へえ！ じゃあ、明日もお歌聞かせてね！」

『ああいよいよ。じゃあ、明日は、“太陽の英雄”のお歌を歌ってあげるよ』

第二章 太陽の英雄

さあ、さあ、詩を歌おう。^{うた}

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！^{うた}

誰もが忘れた楽園の詩。

『やあやあ皆！ 今日も来たのかい？ じゃあ、約束通りお歌を歌おう』

「そのお歌はどんなお歌？」

『君たちは知っているかなあ。騎士様のお父さんのお歌。“太陽の英雄” っていうんだ』

「それなら僕は知ってるよ！」

『おやおや、君はみんなのお兄さん、と言ったところかなあ』

「うん。一緒に見に来た」

『そうかそうか。じゃあ、行くよ』

あるところに少年がいた 彼は森の中に住む

日々出会うは 自分の家族 それと森の動物たち

いつか ここを大きな国にして 沢山の人たちと 幸せに暮らしたいな

少年の 夢は 時を経て 小さな村を作り上げた

その頃 隣の国では 大きな戦争がおこって 国が焼け 人々が
逃げ出したと言う

心優しき少年の 彼は

逃げ出した 民たちを 心安く 受け入れた

村はやがて 街になり 川の下と 川の上へ 貿易で栄えた

森を切り開き 地を作り 青年は働いた

誰にも慕われて 家族に誇られて

やがて青年は恋をする 貴族の美しい少女に

少女は恋をした 心優しい青年に

けれど身分が違うからと 二人は挨拶しかできない

時がたち街はやがて 国と言えるほどに

誰もが認めたる王は 心優しき男

最愛の人を愛せる 喜びを感じながら 男はただ一言

あの日からの思い告げた

『大好きです』

楽しく 愛おしい日々が 毎日毎日 続いて行く

王冠は頂いていないけれども 僕はこのままでも幸せだ

もしこの幸せが奪われるならば 王冠なんて必要ない！

時は流れ 二人の間には 小さな太陽がやってきた

小さな手で指を掴んで 小さな目を二人に向けて

彼女に似た優しい面立ち 彼に似た目と髪の色

そして ついに王城が出来て 優しき男は王となる

運命の日を 前日にして 彼は谷へ落ちた

赤子の泣き声を聞きつけて 谷へと歩む男は 小さな太陽を抱き
上げた瞬間

魔王の手にかかり 谷底へ

叫ぶは かの魔王の 名前

川に流れ流されたどり着いた 河口の街で 日々暮らす

魔王に奪われた国に未練はない けれど愛する妻はかの国

愛し愛され暮らしてきた ここでも愛し愛され暮らす

小さな太陽抱いた子は 父に似て優しく健やかに

息子が九つの誕生日の日 彼は一冊の本抱えて

ベッドで寝むる 息子の 枕元にそっと置いた

王国より走り来た かつての街人

王妃が最後に書き残した 絵本を持って やってきた

彼女は魔王の城の窓から 空へ両手を広げたのだと言う

小さな二人の子の前で 白い星空へ 飛び込んだ

助けられなかった自分にも 彼女を追い詰めた魔王にも

怒りを感じて 涙をこぼして

夜が明ける前に 息子の 前から 姿を消した

野を越え 山越え 船に揺られて 川を上る男は

かつて暮らした家の中で 魔王への復讐を決意した

赤く染まった家 死体はないが 家族たちの姿は無く

旅人つかまえ 話を聞けば

駆け付けた時には 誰もがすでに息絶えていたという

家族を奪われ 妻も奪われ 小さな幸せまで壊すのか

魔王が 起こす 戦の火種は

いずれ我が息子にも 届くだろう

そんなこと させない

王国の城壁は未だ甘く 男は隙間を見つけて たやすく国へ侵入した

賊が入り込んだなど 誰もが思わぬ 静かな夜

隠れた通路を進む男は ついに 魔王と まみえた

振り返り男を見やる 静かな魔王の 瞳は

冷たく 静かで 幼い日の面影が見えない

言葉も交わさず 嘗ての友同士 刃を向けて 刃を受けた

誰もが止めらぬ 白い刃は 魔王の身を貫いた

誰もが魔王と怖れた王でも 国の王には変わらない

やがて英雄と 言われる男も 今はただの賊でしかない

倒れ息絶える魔王の目の前で 男の身には幾千の刃が

太陽が昇るころ 男が見たのは

白の中で 黒く踊る 刃の群れと 自分の影

刃の雨が 止んだころ 地に両膝ついた男は

小さな二つの影を見た

幼い目が四つ 自分を見つめている

倒れることもしない 血に濡れた 男を

幼い目 大きな目 二つは 小さな目 二つを 連れてゆく

太陽の温かさ　ただの熱さに変わり

魔王を倒した　英雄は倒れもせず　膝を折り続け

そのまま　やがて冷たくなってゆく

『はっはっは！　怖いお歌だったかなあ』

「えいゆうーしんじやったの？」

『ああ、そうだよ。残念だけれどそうなんだ』

「ふうん」

『小さい君たちにはあまり聞かせたくないんだろうねえ』

「でも、お歌は上手！」

『それはどうもどうも』

「お兄さん、明日もここに来るの？」

『まあね。明日来てくれたら、違うお歌を歌ってあげよう』

「どんなお歌？」

“『白い星の王妃』、だよ』

第三章 白い星の王妃

さあ、さあ、詩を歌おう。^{うた}

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！^{うた}

誰もが忘れた楽園の詩。

「こんにちは」

『おや、こんにちは！ 可愛いお嬢さんだね、初めまして』

「初めまして」

『ふふ、皆のお姉さん、かな、君は』

「“白い星の王妃様”のお話、知ってるって！」

『そうかそうか…この間のお兄さんも一緒なんだね。これは楽しくなりそうだ』

「歌がお上手なんですってね。私、とても楽しみだわ！」

『いやいや…そんな風に言われると照れてしまうけれど…じゃあ、
いこうか』

貴族の娘として 生まれた美しい少女

戦堪えぬ国から逃げて 小さな村へやってきた

彼女が村にやってきてから しばらくして 国は滅びて

村に人があふれて 村は街になった

傷ついた人々に 優しく微笑む 一人の青年に恋をして

貴族だけれど 私は あの人を愛しているの！

星に願う少女の夢は 街が国に代わるころに 彼の一言で叶うの
でした

『大好きです』

それからまた小さな幸せが 二人の手に舞い降りて

この幸せ感じられるなら　その後ろの意図など　構わない

彼の父　彼の母の思惑

このまま国がなされずとも　貴族の位を

私の父　私の母の思惑

我が娘を　王の妃へ

二人の幸せの影の　暗い黒い思惑を知りながら

心優しき彼　心優しき彼女　小さな太陽　抱きしめる

けれど

幸せは全て　消え去って

体は緩やかに　衰えてゆく

生まれた時から　少ない命　その命を分け与えた　子らよ

彼がいなくなって　あの子もいなくなった

私は一人　闇色の声を聞く

娘を返してもらおう　彼女は息子の嫁だ　あいつはもういない　薄
情な人間め　あの子の心はもう彼にはない　本人に聞いたのか　別
の恋をしているのよ　そんなこと許さない　そっちの身勝手だろう
そっちこそ身勝手な

私の話なんて どうせ誰も聞かないのよ けれど私がいなくなれば きっと良くないことが起こる

でも……。

起き上がることもできずに 悲しむ彼女を助け出したのは

幼いあの日に 川辺で出会った たった一人の 魔王

彼はいう 君の夫を谷へ突き落した 背を押したのは私だと

君から全てを奪ったのも 君の全てを奪うのも

城の中 閉じ込められて 部屋の窓の外には 星空

絵を描いて 空を見上げて 貴方はどこかで生きているの？

それとも谷の底、海の果てにいるの？

城の中はとても静かで 誰もが彼女に優しい

それが魔王への恐れからでも それでも彼女には心地よかった

立ち上がれるようになり 歩けるようになると 魔王は彼女に美しいドレス与え

綺麗な髪飾り 輝く首飾り 様々なものを送った

けれども 彼は一度も部屋へ招いてはくれない

城のどこへでも 行けると言うのにどうして？

ある夜、やってきたのは 血ぞめの魔王で

彼は小さく言った

『貴方が 好き でした』

短い命 分け与えた子らよ

小さな太陽と 大きな星と 小さな星と

消えゆく私を 哀れに思わないでね

魔王は戦へ 王妃は一人 小さな息子を抱き上げて

時が流れれば 景色も変わりゆく

魔王は戦へ 王妃は絵を描き 少年は小さな子を抱いて…

真白に真白に 消えてゆく

彼女の心は 薄い硝子の空の器で

ある夜 魔王が扉を開けると 妹抱いた息子が 一人で

開け放たれた扉の向こう 広がる夜空とたなびく 白の布

窓辺に輝くのは 贈り物達 夜空の星に負けぬほど 輝き

白き星を抱き 白き星を与え 白き星に願った 王妃は
遙か遙か下で 永遠の眠りへ

「可哀そうだね…」

『そうかな』

「お兄さんはそう思わないの？」

『うーん。可哀そうじゃない…わけでもないけどね』

「かわいそーだよお」

『王妃様以外が、僕は可哀そうだと思うなあ』

「ええー」

『君たちには、まだちょっと分からないかなあ。あはは！』

「ところで、お兄さんは明日もここで？」

『まあね。明日も来てくれるのなら“深淵の国王”の詩を歌ってあげる』

「ああ、私のお父さんが知ってるかもしれない」

『へえ？　ところでお嬢さんは、その話を知っているかな』

「名前だけ。ねえ」

「うん。僕のともお父さんがそんなこと言ってた気がする」

『お姉さんとお兄さんの父上達は、きっと次の話もその次もしているのだろうね。ふふふ、楽しみに、待っておいで』

「」「はい！」「」

第四章 深淵の国王

さあ、さあ、詩を歌おう。^{うた}

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！^{うた}

誰もが忘れた楽園の詩。

「お兄さん！」

『やあやあ、今日はいつもよりだいぶ遅かったね、皆』

「あんたかあ、詩歌うお兄さんってのは！」

『おや、ご主人。今日は子供たちと一緒に？ さしずめ皆のお父さん、というところですか』

「そんなじゃねえんだ。俺が先に来ただけでな。後から皆来る」

「暇してただけだろ…」

『そんなこと、言っちゃ駄目ですよ』

「ええー」

『ははは！ ではでは今日も歌いましょうか！ “深淵の国王”』

「わーい！」

『じゃあ、いきますよ』

彼が覚えているのは 暗い森と暗い道だけ

家族を逃がすために 父は兵に切られて

家族逃がすために 母は兵に連れてゆかれた

命からがら逃げ たどり着いたのは 小さな小さな村だった

はじめに出会った少年は 彼に優しくてを差し出した

けれど 祖父は彼の手を払った

平民が！ と罵った

彼にはなぜ 祖父がそう言うのか 全く分からなかった

けれど 振りはらわれても少年は 微笑んでまた手を差し出す

怪我をしているなら 早く 手当をしないといけないよ と

村が街へ変わってゆく

優しき少年と共に森を開き 共に笑い 共に友と思いつた

けれど楽しい日々は終わる

知らぬ影 銀の鎧の男たち 剣構え言った

暖炉の前の祖父は 既に息絶えている 剣が

魔王の血を引く人間 根絶やしにせよと 帝王の命だ！

迫る刃に少年は 驚き 転げて暖炉に 身を投げた

体に熱さは感じない けれど腕が焼けるようだ

炎の中から出てきたのは たった一つの大きな 金の指輪

指輪の烙印 腕に刻まれて 指輪は指を焼きながら右の手に

燃え上がるのは 私ではない お前達と その国だ！

我らから国奪い 民を奪い 全てを奪った お前たちを呪う！

指輪に眠りし魔王の怒り 少年は魔王になった

焼けつく痛みは体ではなく 心を爛れさせてゆく

支配は受けない けれどお前が望むのなら この体は使わせてやる
だから どうか

亡国の王子と知らぬままに育った 小さな小さな少年は

幼い心根故に 一つの 幸せを 願った

街は国へ 友は谷へ 背を押したのは私

国王となり隣国を滅ぼすために 友でも容赦はしない

けれども きっとこの谷の向こう側 川の緩やかになるところで

彼は生き続けるだろう

小さな願い 魔王は 忘れずに叶えてくれた

幼いころから 思い続けた あの少女 友の妻 彼女を私のものに

哀れな彼女は やせ細り 夢で

夜な夜な訪ねても 彼女は眠り続けるだけ けれど

床に散らばる白い紙には 白と黒の絵が描かれている

彼女らしい 可愛らしいその絵達 眺めて彼女に寄り添った

魔王は戦い滅ぼす 隣国の帝王を討つために

討たれる側になろうと 構わない あの国を滅ぼせるなら

魔王の血を継ぐ 私は 小さな幸せだって許されない

人を屠り 村を焼いて たった一人で戦いゆく

兵はいらぬ 城壁を作り上げろ

誰もが入り込めぬような 完璧な防壁を作り上げろ

奴隷を雇っても構わない 買っても人を集めろ

城壁は徐々に出来上がる 魔王は戦い続ける

恨みを忘れぬ 怒りを忘れぬ 暗い暗い闇を抱えて

ある日 戦へ出た魔王 光の矢に撃ち抜かれて 癒えぬ傷は
痛まず

兵器を切り刻んだ

けれど 体は冷え行くだけ 魔王とはこれほどまでに

冷たく 無機質なもの なの だろう か？

夜 城へ帰れば 彼女が窓辺で立っていた

部屋の扉をたたくと 彼女は魔王を見上げた だから

『貴方が 好き でした』

小さくつぶやいた

すると彼女はただ 頷いて 優しく 微笑んで

あの頃と変わらぬ笑顔 暖かな掌は 血に濡れて 冷たい 魔王
の何かを溶かした

刻印は消えない けれども爛れる心は癒える

束の間の安らぎが 愛しいと 彼は思う 今は

星空に彼女が消えた日から 炎はたちまち燃え上がり

爛れる心 凍りつく何か 魔王は魔王でしかない 幸せなどあり
得ない

戦いの上に戦いを重ねて 苦しみの上に苦しみを重ねて

けれどある時 息子が部屋にやってきた

そして魔王から指輪を奪うと ろうそくの火にかざし 胸にそれ
を押し当てた

僕だって 父上の 役に立ちたいのです

微笑んだ姿は どこか彼女に似ていて 魔王は茫然と 立ち尽す

早く早く隣国を 潰さなければ 次の魔王は…

戦いに明け暮れ 光の矢は降り注ぐ

矢に阻まれて 帝王に近づけない

早く早く隣国を 潰さなくては けれども

夜が明ける前に 踊りでたる太陽 彼の剣は燃えるよう

焼ける痛みを与えて

隣国の兵器に討たれるより かつての友に討たれる方が

倒れながら魔王は 彼に振り下ろされる剣を見た

やめろと口は動いても どうしても声は出ない

魔王は 暗闇に落ちてゆく

太陽に焼かれる友を見ながら

深い深い 暗闇へ

『おやおや…ずいぶんと観客が増えましたねえ』

「いやあ、確かに、歌が上手いなあんた！」

『ほめたって何もでやしませんよ』

「ところで貴方はどこに宿を？」

『？ 宿だなんて…僕はその辺にいますよ。いつでもここにいますので、あいたければ…』

「ほら！ 僕の言った通りだよ！ いちいち隣町まで宿取りにいくわけないんだから！」

『？』

「いやいや、なんということだ！ 今日には家にとまってくださいませんか」

『いえ…お気づかいなく』

「いやいやいや…もう気になさらないで！ そうだ！ 明日はどうぞ町の中で！」

『悪いですよ…ああ、そうだ。明日もまたここにきて、同じ様に思ってくださいたら、その時は必ず』

「残念です…でしたら毛布だけでも」

『氣遣ってくださなくてもいいんですよ。どうせ、後数日で海の向こうへ戻るんですから』

「ねーねー！ 明日は何のお歌なの？」

『明日はですね…“宵闇の皇子”のお話だよ』

「家内が好きな詩ですね」

『そうですか。でしたらどうぞ、明日はご夫婦揃っておいでください』

「あとで、毛布を持ってきますから」

『それはどうもありがとうございます。では、皆さん、また明日』

第五章 宵闇の皇子

さあ、さあ、詩を歌おう。^{うた}

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！^{うた}

誰もが忘れた楽園の詩。

「おやまあおやまあ！　こんな若い男の人だなんて！　昨日は冷えたねえ、大丈夫だったのかい？」

『奥さん…お気になさらずに。ありがとうございます。今日はまた、ずいぶん早い起こしで』

「はっはっは！　今日は午後から、明日のしたくがあるのです」

『皆様揃って…僕の歌を聞くためにここまで来ていただくだなんて』

「それだけ上手いってことだよ」

『ありがとうございます』

「今日のお歌：なんだったつけ？」

『今日は“宵闇の皇子”だよ。奥さんが好きだって言う、ね』

「楽しみだわあ」

『では、皆さん、お座りになりましたか？　じゃあ、いきますよ？』

小さな頃から聞こえていた　小さな声が聞こえていた

囁くような声は　金色の指輪の中から

焼けるような怖い声が　炎携え聞こえてくる

けれどどうして　心の底からは　恐れられないのだろう

星空に帰った母　太陽の影に帰った父

残された妹と　城で暮らす　でも

金の指輪が言うには 城はとても危ないらしい

けれども 少年は胸に手を当てて そっと指輪に語りかける

大丈夫 大丈夫 信じてみよう

まだ何も 起きていないのだから

大丈夫 大丈夫 信じていよう

何かが 起きても 何とかするから どうか怒らないであげて

父から渡されはしなかった 彼の亡骸から取り上げた

金色の美しい指輪

この胸に 刻印を刻んだ 魔王の証

真っ黒い髪 真っ黒いマント 真っ黒い衣装 真白な剣

真白な肌の 黒い闇の瞳 見渡すは枯れかけた王国

隣国は未だに滅びず 魔王は怒り 荒れ狂う

けれども この国の 民達は 関係がないと 彼は考える

それでも爪痕は深く大きい 今すぐに全てを戻せはしない

隣国に寝返った民がいるという それでも仕方がないと思う

少しずつ少しずつ 良くしていけばいい

あわよくば隣国との関係も

魔王の怒りの炎を 彼は優しく包む

燃え盛る熱さを 静かな冷やかさが包み込む

皇子は知っていたのだ 幼いころから 分かっていた

魔王とは一つの国を 大事に大事に 思っていた 全ての魂の声
だと

平和を願う声 高らかに 今は奪われた悲しみが強いだけで

いずれ彼らも分かってくれるだろう

それを受け入れる 力が自分には あるのだからと

でも

人は誰もが 心広く 受け入れられるわけではない

それを知った青年国王は 静かに妹に言った

しばらくここから離れなさい 城にばかりいては 窮屈だろう？

少しばかり川を下った場所で 違う景色を見てきなさい

兄の言葉に少女は頷き 疑いもせずに 笑顔で手を振る

微笑む国王は 剣を振り上げ 剣は一人の民に落ちた

誰かを殺めて それで手に入れた 幸せなど幸せではない

この手は汚れてしまったけれども どうか彼女だけには それを
させたくはない

少女が消えた 城は冷え切り 魔王は誰もを追い出した

そして光の矢が降り注ぐ 戦場にたった一人で 躍り出た

魔王の再来と言われて 兵器などもろともせずに

当たらぬ矢など 所詮は目くらまし 人間たちよ我にひれ伏せ！

吠える魔王と 隣国の戦いは 熾烈を増しそして 大地を抉る

魔王の目を たった一つ 傷つけるしかできない 隣国

するとある日たった一人の青年が 彼の行く手に立ちはだかった

父を殺めた 男に瓜二つの 青年は隣国の鎧を纏い

真っ直ぐに魔王を見つめて たった一言 呟いた

『彼女は 生きている のか』

そのおもざしの中に見たものは 憎いはずの男の顔と 窓辺から
空を見上げていた優しき母の面影

その瞬間 誰かが叫んだ 兄様と叫んだのは

遠い日に城から逃がした たった一人の少女で 振り返り走り出
した 魔王の背に矢が迫る

けれども魔王は そんなことなど気付きもせず 戦場に出てきた
妹をかばう

光の矢は真っ直ぐに魔王に向かって飛びゆくが

隣国の騎士の刃は それを弾き そして二人を見て 言った

『元氣そうだ 良かった』

それだけを言い残して 騎士は去ってゆく 何もせず

城に帰りついた魔王 妹の手を振りほどき たった一人玉座へと
歩く

と、突然目の前が暗くなる 何が起きたのかなど分からぬまま
顔を手で蔽う

痛みは後からやってきて 両目が見えない 暗闇へ

抜き去った鉄の矢を投げ捨てても 突き刺さる矢は数知れず

胸の刻印は脈打つようで　小さな囁きは　怒鳴りつける

青年ではなくて　国民たちへ

けれども　青年は微笑んだ

大丈夫　大丈夫　怒らないであげて

大丈夫　大丈夫　殺さないであげて

私がここで倒れれば　きっと終わるのだろう

大丈夫　大丈夫　大丈夫…

『優しい人のお話でしたよね？』

「ああ、もう、何度聞いてもいいわあ…魔王だなんて、もう！」

『人間の心理でしょう。父が悪ければ子も悪い。父も良ければ子も良い子。……そうでないと証明するのには、時間が短かったんでし

ようね』

「それにしてもいい声だわぁ！ 旦那が内に呼びだがつてたのも分かるわね！」

『みんなに慕われているご夫婦のようですね』

「そうだよ！ 二人とも優しいんだ！」

「そーなんだよー！ 僕らのめんどーみしてくれるのー！」

「わたしにもやさしいの！」

『おやおや、それはいいことだ』

「孤児院におりまして…ですね。どうか、今夜は我が家にお泊りください」

『約束ですし、ね。分かりました』

「できれば、明日の祭りでも歌ってくれないかねえ…」

『私ごときの歌でいいなら』

「それとね、準備している間でいいんだ。屋根裏の子にも歌ってあげてくれないかい」

「おい、お前…それは頼みすぎだろう？」

『？ お安いご用です。親切にしていただいたご恩には報いますよ』

「ああ、ありがとうございます」

「病弱でね…部屋から出られないんだ」

『そうですか…では、早速お伺いさせていただきますよ』

「ねー！ 明日のお祭りで、何歌うの？ おんなじゃつ？」

『いいえ。明日は“常闇の女王”にします。ちょうど、次のお話ですから』

「ふーん」

『では皆様、明日の祭りを、どうぞ、お楽しみに』

第六章 常闇の女王

さあ、さあ、詩を歌おう。^{うた}

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！^{うた}

誰もが忘れた楽園の詩。

『盛大なお祭りの最後を飾るのが僕だなんて…本当にありがとうございます
ございます』

「いいんだいいんだ！　ところで、あの子には歌ってやったのかい
？」

『ええ。今は屋根裏部屋から、次の話を聞いてくれますよ』

「うんうん！　あの子出て来れないから、いつとも一緒に楽しめな
いんだ」

「ありがとうねえ」

『いいえ』

「お歌！ お歌はなあに？」

『“常闇の女王”、だよ。坊や』

「はやくはやく！」

『ははっ！ 元気がいいね。じゃあ、いくよ』

私は父も母も どんな人なのか覚えていない けれども侍女が言っていたのよ

兄にそっくりな人だったと

でも 兄にそっくりな私は 母によく似ていると 言われる

なら兄も母にそっくりなのでしょう 兄にそっくりな私は父にも似てる

幸せだと思える日々を 城で送っていた少女

でもある時 起きたこと その事件のせいで 彼女は城から離れた

夜中に目が覚めて 驚いて飛び起きれば

知らぬ男が 剣振りかざして 少女に振り下ろした

でも当たるはずもなく 逃げだした男に 少女は剣を構える

兄との訓練で使いなれた 剣 誰も殺せない 守る剣

次の日兄は 私に言った

少しだけ城から離れていなさい と

遊んでおいでと言っているけれど きっと 違うのだわ と思
った

兄の 言う通りに 川を下り 違う景色見える街まで来た

その街では 奴隷が未だ城壁を作り続けている

その中の一人に少女は 目を奪われて 呼び止めた

彼は手を休めて 振り返る ここにはもう見張りはいない

ただ 皆 魔王が怖くて 働き続けているだけなのだと

彼は言っただけで笑んだ 兄によく似た顔だった

それから毎日話しかけた

彼は笑って答えてくれた　でも　ある日彼は笑顔のままで　小さく口を開いて

僕は奴隷だよ？

そう呟いた

奴隷でも構わないのよ　だって貴方　兄に似てるの

言い返したら　彼は肩をすくめて　一冊の本を差し出した

古びた絵本　けれども　どこか懐かしい香りのする絵本

母のものだと　父が書き残した　最初で最後の　誕生日の贈り物

その日が最後　彼がいたはずの　城壁は作りかけ　けれども奴隷はいない

隣国に　寝返ったのか　街の人が囁き合う

なら私たちも　と　街は日に日に人が姿を消していった

急に　長く離れていた　兄が気がかりになり　少女は国へ駆け戻る

兄は戦場で　戦っているという

追いかけて追いかけて辿り着いた戦場では

あの青年と　兄が対峙して　光の矢が降り注いでいた

兄を呼び 振り返る 兄の背に 迫る矢を 青年は弾いて言った

『元氣そうだ 良かった』

あの日と変わらぬ笑顔で 一つだけ

彼なら 兄を分かってくれるかもしれない そう思っていたのに
城では

囁くような断末魔が耳につき 追いかけた兄の背は地に伏していた！

どうして！ どうして！ お前たちを守るために 兄は戦った！

どうして！ どうして！ お前たちは兄を 殺した！

黄金の指輪が嘆き 怒りの炎は少女へ燃え移り

取り上げた剣で 全てを 無に帰すと彼女は決めた

だからお前たちは ここで 死んでしまえ！

魔王が死んだと 思っていた 城の人間達の前には

刺客の死体を前に 玉座で微笑む 魔王が一人

私が 死ぬと 思ったのか？ この虚け共。

震え上がる裏切り者達を 容赦なく切り刻む魔王は

黄金の指輪を携えて 隣国へ矛先を向ける

国は勝手に滅びるだろう ならば兄を殺したあの国だけを 狙えばいい

高らかに笑う魔王は ただ心の痛みに悲鳴を上げる

人間は 汚らわしい 生き物だ！

戦い明かし たどり着いたのは

優しき一人の青年 雷に撃たれることもなく 彼は立ち尽くす

彼女は 元氣か そう一言 言う

剣を 降ろして真っ直ぐに 彼女を見た

雲が退ければ 星が覗いて 涙のように落ちてゆく

魔王の向こう 少女を見つめて 騎士は言った

大丈夫 大丈夫 これは君が望んだ世界じゃない

どうして どうして 人は汚いのよ

大丈夫 大丈夫 僕はそうじゃないから

どうして どうして 人はとても汚いわ

大丈夫 大丈夫 僕は裏切らないよ

君が僕を 裏切ってもね

彼はそう微笑んだ

魔王は 剣を下ろし 優しき青年に歩み寄る

太陽の英雄 白い星の王妃 深淵の魔王

宵闇の皇子 常闇の女王 流れ星の騎士

その瞬間

全てが実を結び 夢のような 終わりへと

流れ落ちた星は 微笑んだ

「? 魔王、倒されないの?」

『ええ。このお歌の中では、ね。この後に倒されてしまうんです』

「ふーんふーん」

『楽しんでいただけましたでしょうか？　これで、楽園の歌はお終いです』

「はあ…まさか全部知ってるやつがいるなんてなあ」

『おやまあ、おじいさん。もしや、この歌を街に広めたのは貴方ですか？』

「ああ…ご先祖の書があってなあ」

『では、果ての大陸からの人なんでしょうねえ』

「そうらしいがの…遙か昔の話じゃからの、わしにも、分からんわ」

『でもしょうとも』

「そういうあんたは、誰から聞いたのじゃ？」

『僕は…僕を生み出してくれた人から。全てを聞きましたよ』

「ほう。あんたの両親も、果ての大陸の子孫かもしれんなあ」

『……。ふふっ、そうですね！　ではではお開きと参りましょう。それでは皆様！　ありがとうございました！』

「とってもおもしろかったよ、魔王さん」

『そんなこと言ったらいけないよ、果ての大陸から魔王が来てしま
う』

「おっかしなこというね、もう来てるでしょう」

『君って言う人は…命がないからこそ、そう言う事を言うのかい？』

「うふふ、うふふ！　そうかもしれないし、違うかもしれないよ。
魔王さん！　もっとお歌を聞かせて頂戴！」

『今日は駄目だよ。だってもう一つ聞いただろう？　だから、今日
は駄目』

「だって明日、帰っちゃうんでしょ？　楽園に」

『だから、そういうことを言っではいけないよ』

「お歌聞きたい！」

『我儘な子だね……』

「今までいっぱい我慢したもん。ねえ、魔王さん。魔王さんだった

ら聞いてくれるよね？」

『……でも、今日は駄目』

「ええーっ」

『じゃあ、もう暫く待ってくれるかい？』

「どのくらい？」

『今日から明日にかわる瞬間。そうしたら、歌を歌ってあげるよ』

「待つ！　ちゃんと起してね」

『いいですとも』

「どんな歌なの？　はやくききた……けほっ」

『おやまあ……。ちゃんと起しますから、眠っていなさい』

「うん……けほけほっ！　なんて、名前の……歌？」

『誰も知らない、誰にも知られない、真実の歌。本当は知りたくない、知らない方がいい歌。それでもいいの？』

「うん……」

『次のお歌はね、塗りかえられた歌“流れ落ちた星の騎士”、だよ。しばらくお休み、坊や』

第七章 流れ落ちた星の騎士

さあ、さあ、詩を歌おう。^{うた}

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！^{うた}

誰もが忘れた楽園の詩。

『起きて、起きて』

「……」

『起きてよ、ねえ』

「……」

『しょうがないなあ。君が起きてくれないと、誰が僕の歌をきいてくれるんだい？』

「……」

『今日は“流れ落ちた星の騎士”だよ？　ねえ、ねえ！』

「……」

『ああーあ。仕様がな。い。今日もまた、一人で歌いますか…』

星の騎士と称えられ　英雄と言われても

嬉しいだなんて思わなかった

父から貰った　最初で最後の　贈り物の中には

古い写真が挟まれていた　僕と　父と　たぶん　母

絵本だけが家族で　家族は一つの絵本

けれど誰もが望むから　彼はいつも笑っていた

ある日　写真の母に　似た少女が　奴隷の青年に話しかけた

兄に似ていると　微笑む彼女

青年は　一目で　恋に落ちた　けれども

恋ではないと気付いたのは 逃げ込んだ隣国の城の中

城から逃げ来た召使が 持っていた一枚の写真

青年の持つ写真の女性 召使が持つ写真の女性

母に抱かれるのは 彼女の子ら 笑み浮かべる母に抱かれて眠る

茶の髪の赤ん坊 黒髪の赤子

召使の話では 魔王がこの子で もう一人 娘がいるという

黒い髪 黒い目の 可憐な少女

きっと彼女が そうだったのだろう ああ

英雄の息子よ 我らを守りたまえ

人は青年に鎧を着せる

英雄の息子よ 魔王の子を討て

人は青年に 剣を持たせた

戦場に立たされた青年は 一人の魔王と 出会った

黒い隻眼の 青年は 目を見開き 剣を構えた

父の敵に 瓜二つの 騎士を前に 魔王は でも

剣を向けただけ　たち切りはしない

騎士は小さく　呟いた

『彼女は　生きている　のか』

答えるような　声は　魔王に向けられた一言

光の矢　背より放たれて　騎士はそれを　弾き飛ばす

我が兄弟を傷つける　者は許さない　たとえひとつの国だとしても

黒い眼の　黒髪の　兄弟に　青年は小さく　呟いた

『元氣そうだ　良かった』

国に戻れば　帝王は言うた

なぜ魔王を討たなんだ　と

騎士は何も言わず　黙したままで　懷の絵本に手を添えた

魔王だと　今までは　思っていた　けれど今は　違う

愛すべき　存在と　知っているのに　護るために　そばにいられない

そうだ　僕の父は　彼らの父を　殺めたのだから

いつか きつと 分かりあえると 思っていた あの日の夜

魔王の城を包むような 黒雲の雷で 目が覚めた

荒れ狂う雷の様子に 青年は表へ出たが

帝王は 青年を 行かせはしない

兵たちは向かわせるのに 騎士だけを引き留めた

何が起こるのか 分からぬゆえ お前はまだ行かせるわけにはい
かぬ

そうしている合間に 兵たちは 次々と 命落としてゆく

ああ 幾千の星が流れてゆく 死した命の数だけ

流れ燃え尽きた星は 暗いくらい闇に 落ちてゆく

引き留める帝王を 振りはらい 騎士は一人で 戦場へ

突き刺さる 雷鳴は 彼を避けて 導くかのように降り注ぐ

荒れ狂う 大地に立っていたのは 魔王の姿のあの少女

彼女は泣きながら笑って 人間は 汚いのよ！ と 叫んだ

だから 騎士は 剣を捨てて 魔王の少女に 手を伸ばす

裏切らないよ とほほ笑んで

君は裏切っても構わないから さあ

今君に 切られても 僕はきつと 笑って許すだろう

君が この手の中に 逃げ込んできたら 守るだろう

剣を 捨てた 騎士に

魔王は 心を開く

兄に 似ている その 騎士に

魔王の少女は 剣を捨てた

ああ 倒れる 魔王の少女 彼女を受け止めた騎士は

茫然と 彼女を 受け止め 地に膝をついた

どうして どうして 彼女は 倒れたのだろう

どうして どうして 彼女は 笑っているのだろう

大丈夫 大丈夫 貴方のことは 信じているわ

大丈夫 大丈夫 裏切ったのは 貴方じゃない

魔王ではなくなった 少女を貫いたのは 光の矢

魔王ではなくなった 少女はただ 兄に似た騎士に抱かれて

流れゆく 星を見上げた

彼女も 星の 一つになって 流れてゆく

泣くこともできずに 青年は 魔王を倒した英雄に

流れ星の騎士と呼ばれて 偽りの笑みを振りまいた けれど

魔王がいなくなっても 人は争いを 止めはしない

帝王は次の戦の準備を 青年は戦場に 立たされた

ああ 君の 言う通りだね

人間は とても 汚い

どうして どうして 魔王はいないのに また 戦を始めるのか

偽りの平和 偽りの笑顔 偽りの優しさ

ああ 金の 指輪が光る

熱く熱く 輝いて 見える

大丈夫 大丈夫 分かったんだ 簡単な ことだね

輝き流れる星は 燃え尽きれば 宵闇に消える

常闇の世界で深淵の底へ堕ちてゆく 白い星 小さな太陽

戦を続ける国で 帝王の前で 膝をついた騎士は

笑みを向ける彼に 剣を振り上げて 嗤った

人間が いなくなれば 戦なんて できないだろう

何だ簡単な 話

これなら 僕にも できるね

金の指輪抱いて 熱く熱く 燃える剣振りかざし

誰も彼もを切り伏せて 一夜で国を滅ぼした

彼こそ 真の魔王 赤く笑うその男は

英雄の心を 殺して 魔王として 蘇る

この国だけがなくなっても 汚れた人間がいるなら

争いはいつか起こるだろう ならば 今ここで 全てを消そう！

魔王は たった一人で 人間の命を奪い続けた

幾夜も巡り 夜空を星が 流れなくなった頃

そこは楽園となった

『楽園だって、楽園』

「……」

『なんだい、もう。君の生まれ故郷だろう？』

「……」

『起きてるかと思ったのに。よく寝るね、君は』

「……」

『……』

「……」

『……次は“灰色魔王”だよ。聞きたくないのかい？』

「……」

『……じゃ、また明日』

最終章 灰色魔王の物語

さあ、さあ、詩^{うた}を歌おう。

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩^{うた}を歌おう！

誰もが忘れた楽園の詩。

『ああ、あんまり寝てるから…』

「……」

『そのうち鳥とか、巣、作っちゃうかもよ』

「……」

『会話してくれないと困るんだけど』

「……」

『……はあ。やることもないし、歌ってあげるよ、“灰色魔王”』

「……」

『じゃ、いくよ』

彼が目覚めると 目の前には 緑の草原が広がっていた

木々の声と風の歌と 青い空流れる白い雲 美しい場所だと知ったのは

海を渡って旅を してから

海の方こうで 彼の故郷は 楽園だと 言われていた

誰もが立ち入れぬ 楽園 人がいない 大陸

彼が生まれて初めて 手に取ったのは 古い絵本

朽ち果てた亡骸の下で 静かに眠っていた

本を開くと 多くの写真が舞い落ちて 白い花の上で揺れる

写真 一つ一つ眺めて 彼はふと気がついた

若い青年が持つ剣は 亡骸の横に突き立てられている

黒い髪 of 男の 指に光る金の輪は 今は自分の指で きらきらと
光輝く

巡り巡る 歌の真実

初めから知っている 歌

第一章 太陽の英雄

第二章 白い星の王妃

第三章 深淵の国王

第四章 宵闇の皇子

第五章 常闇の女王

第六章 流れ堕ちる星の騎士

海の方こう側では 書き換えられた 物語が

語り継がれ 広まり やがて ただの幸せな物語へ

痛みだけを置き去りにして 都合のいい様に語り継ぐ

けれど

屋根裏でひっそりと生きる 一人の少年は

真実の詩を聞いた うた ひとつの吟遊詩人の詩を うた

彼は少年に尋ねた

この話の続き 聞きたいかい？

少年は大きくうなずいた 彼も頷いて笑った

じゃあ 一緒に 楽園に いこう！

太陽が村を燃やした頃 飛び出した 屋根裏部屋は からっぽさ

吟遊詩人は笑顔で 少年を抱えて歩く

毛布でくるまれた少年は 詩人と共に世界を回る

やがて大陸の端に着くと 詩人は 少年に問いかけた

海を越えて 楽園に行くよ 戻ってこれないかもしれないよ

それでも少年はうなずいた

どうせこの命はもう 長くはない

海を渡る 船に揺られ 詩人の胸で目を閉じた 少年

かち かち かち かち

詩人の胸から音がする

かち かち かち かち

とても不思議な音がする

少年の弱々し音とは違う 他の人の音とも違う

詩人の胸は かちかち と 時を刻む 止まることなどないように

楽園へ たどり着いた 少年と ひとつの詩人は

毎日 詩を^{うた}歌った

けれど

ある日 詩人は歌わなくなった 代わりに 少年は歌い続ける

ある日 少年は苦しくなくなった 代わりに 詩人は動かない

かち かち かち かち

胸に手を当てれば 響く

かち かち かち かちん

詩人の胸の音 途中で止まる

どうしたら治るのか 分からない

歌しか知らない 少年は

歌の続きを探すために 広い世界を渡り歩く

隠された 第七章 灰色魔王のファンタジー

かち かち かち かち

かち かち かち かちん

胸の中のゼンマイが 歯車がうまく回らないんだね

少年は ゼンマイ探し 世界を 歩きまわる

ああ、いいゼンマイを持っている 小さな小さな男の子

胸の奥の そのゼンマイを 僕に出来ないかな？

くれなくても もらってゆく けどね

楽園へ戻って 詩人の 胸の中へ 赤いゼンマイはめ込んだ

かち かち かち かち

かち かち かち かち

ゼンマイは 正しく回る けれど 詩人は 動かない

そうか 体が動かないんだね？

腕と 足を 探してくるよ！

腕と 足を 探して 世界を歩き回る

双子の女の子 綺麗な 腕と足 ください

くれなくっても もらって ゆくけどね

詩人の 腕と 足を 取り換えてみた

けれども やっぱり 詩人は目を覚まさない

そうか 目が見えなくって 動けないんだね

じゃあ綺麗な 目をさがしてくるよ！

目を探して 世界中を 歩きまわる

綺麗な黒い眼の 女の人がいる

ねえ お姉さん その目を 僕にくれませんか？

いやなの？ 片目だけでもいいよ 僕に くれませんか？

くれなくっても 勝手に もらってゆくからね

詩人の目を 取り換える 綺麗な黒い目だけど

詩人は動かない どうしてだろうと 胸に耳を当てる

かち かちかちかちん かち かちかちかちん

ちよつとおかしな 音がしてる

ああ またゼンマイが 壊れてる

どうしてだろう どうしてだろう

新しいぜんまい 探しに

今日も 少年は 世界を 歩きまわる

かち かち かち かち

かち かち かち かち

かち かち かち かち……

『あ！ そっか…そうだ！』

「……」

『魔王さん、魔王さん、僕、分かったかもしれない！ 僕のぜんまいをあげるよ』

「……」

『きっと、僕のぜんまい、魔王さんにぴったりだと思うんだ』

「……」

『ちょっと待っててね。今、つけてあげるから』

「……」

『魔王さん、魔王さん。早く僕にお歌を歌ってよ』

「……」

『僕のぜんまいあげるから』

「……」

『魔王さん、魔王さん』

かち かち かち かちん

かち かち かち かち

正しく刻む胸の音 少年は赤い手で 微笑む

僕の ぜんまい ぴったりだ

そう言って にっこりと 笑った

詩^{うた}を 歌う 人形

白でもなく 黒でもない 魔王

詩^{うた}を 歌う 人形

生きてもなく 死んでもない 魔王

灰色魔王の人形は 新しいぜんまい 貢がれて

灰色魔王の人形は 新しい腕と足 貢がれて

灰色魔王の人形は 新しい黒い目を 貢がれて

灰色魔王の人形は 少年の心臓^{くちづけ}で 目を覚ます

本当に 大切な 命のぜんまい 少年は魔王に差し出した

ああ 起き上り微笑んだ 魔王は

微笑んで見上げる血濡れの少年を

抱きしめそして つぶやいた

『おはよう……おやすみ』

かち かち かち かちん

かち かち かち かちん

少年のぜんまいが 止まってゆく

魔王は暖かな胸に手を当て 夜空に流れる少年を

優しく見守っていた

君の心臓 大事にするから

安心して 眠るといいよ

『もう寝ちゃったかな？』

「……」

『馬鹿だなあ、普通に生きていればいいのに』

「……」

『けれど、人間の心臓って言うのはいいものだね。とても温かいよ』

「……」

『ところで坊や、君は僕が持ってる絵本、読んだことあったかな』

「……」

『記憶が確かなら、きっと読んでないはずなんだ』

「……」

『ふふっ！
実は僕も読めないんだ。灰色にくすんだページばかり』

「……」

『始まりもなく、終わりもない、そんな話だったのかなあ』

「……」

『君はどう思う?』

「……」

『まあいいか。今はお休み』

「……」

『今度は僕が、君にピッタリの心臓^{ぜんざい}、見つけてあげる。そうしたら』

「……」

『一緒に取りに行こうね』

さあ、さあ、詩^{うた}を歌おう。

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！

誰もが忘れた楽園の詩。

命を与えあって 奪いあうだけの物語。

宵闇の体で 常闇のおもぎしで 燃え尽きた星の記憶を持って。

太陽の熱さ知り 白い星の輝きで 深淵の深きそこで眠る。

灰色魔王の楽園。

人が立ち入れぬ 楽園。

立ち入った人間は やがて歌う人形となる。

さあ、さあ、詩を歌おう。

響け空へ、届け海へ。

さあ、さあ、詩を歌おう！

誰もが忘れた

誰もが憧れた

誰もが恐れる楽園の詩。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9995g/>

吟遊詩人形

2010年10月9日00時51分発行